「教育実習を終えて」

[公立高等学校　英語]

3 週間の実習が終了した。今まで生徒としてしか関わることのなかった教育現場に、教育実習生という立場ではあるものの、初めて教師として通い、教壇に立ち、生徒や周りの先生方と関わる中で多くのことを学んだ充実の 3 週間だった。この実習では、主に教科指導について、生徒との関係について、そして教師という仕事について理解を深めることができた。

まず、授業について。コミュ英 2 クラスと英表 1 クラスの合計 3 クラス、15 コマを担当した。クラスによってやり方、反応、全て違い、同じ指導案で授業を行っても決して同じにならないことが面白かった。約 40 人に向かって授業をすると、最初の頃はどうしても前の生徒ばかりに注意が向いてしまった。生徒と教師は 1 対 40 ではなく、(1 対 1)×40 だと聞いたことがあったが、それを実感した。全体を見渡し、ひとりひとりに気を配ることが大切だと感じた。多くの先生方に指導していただく中で、「授業内のすべての活動には意味がある」という言葉が印象に残っている。指導案の本時の流れにとらわれ、次はこれ、その次はこれ、と、断片的になってしまった授業もあった。授業のテンポ、流れ、目標を意識することが重要であると学んだ。また、生徒の学力に合わせ少しずつ活動を変化させ、負担をかけていくことで、力を伸ばすこともできる。

実習を通して、教材研究の大切さを痛感した。教材は読むだけでなく、それに関連する知識や深い読解が必要である。ある先生が、「英語科は英語だけできてもダメで、毎回題材の勉強をすることが必要だからずっと学び続けることが大切」と言っていたことが印象に残っている。また私は、文法の説明がうまくできず困った。私は文法問題を感覚で解いてしまうが、英語の教師として、正しい文法知識を付け、なぜそうなるのかまで説明できるようにならなければならないと思った。また、英語でも、コミュ英だけではなく、英語表現や単語テストなど、今まで習ってきたことを踏まえるか踏まえないかで相当変わることを知った。単語学習の教材と関連付けることで生徒の理解を促進できると思った。

次に、生徒について。生徒との関係性は一番苦労したことかもしれない。最初の 1 週間は、生徒に観察されている気分があり、今思えばタイミングや隙を探られていたのだと感じる。名前を覚えたり、挨拶をしたりとつながりを作ることで、2 週間目からは、だんだんと話しかけてくれる生徒も増え、授業もやりやすくなった。授業をする上で生徒とのつながりがあること、性格を理解することは重要なポイントであることを実感した。先生方が想像以上に生徒のことを理解していることに驚いた。

授業外では、現役の先生の授業風景や生活を見ることができ、教師という仕事が生徒としての観点ではわからなかったことまで知ることができた。授業以外にも生徒指導、部活動、校務分掌など、仕事の幅広さは聞いていたが、それを実感した。また、教育実習生のみの控室がなかったことは想定外だったのだが、そのおかげで、先生方と同じ準備室で生活でき、いろいろな先生の話を聞くことができた。また私は教師としての適性に不安を感じていたところもあり、この実習でそこを試すことも目標のひとつだった。研究授業では落ち着いて安定感のある授業だったと多くの先生方にほめていただき、また最後の授業で生徒に協力してもらったアンケートでは、教師に向いていると思うという意見を多くもらい、少し自信がついた。私自身も、まだ今回の実習で学べた範囲は狭いかもしれないが、授業を始めとする実習を毎日楽しめたことが大きな達成だと感じる。

実習を終えた今、教育実習を無事終えることができ、安心した気持ち、達成感とともにとまだまだだと

いう気持ちを感じている。この 3 週間で学んだことを忘れずに、次のステップに進みたいと思う。